

2025年8月29日（金）開催 学術情報流通に関する連続セミナー 第10回
「人文学のためのオープンサイエンス：ドイツでの体験から」
開催報告

2025年8月29日（金）13:30～15:00、研究大学コンソーシアム「学術情報流通の在り方に関する連絡会」主催による、学術情報流通に関する連続セミナー（第10回）「人文学のためのオープンサイエンス：ドイツでの体験から」を開催しました。

今回は、筑波大学人文社会系の宮川創准教授を講師に招き、講演では、ドイツの大学でデジタル技術を活用したコプト語（古代エジプト語の最終段階）研究の経験を持つ宮川氏から、ドイツにおける若手研究者の研究環境や、デジタル・ヒューマニティーズ（人文学の研究にデジタル技術を活用する学際的な学問分野）のさまざまな研究事例が紹介されました。

ドイツでデジタル・ヒューマニティーズが進む理由として、豊富な公的資金の投入や、多様な専門人材がプロジェクト単位で協働する研究環境基盤の充実が挙げられました。また、研究成果と研究データを標準化された方式でデジタル化・公開することで、情報が円滑に流通して二次利用を促進し、新たな研究への展開につながる好循環も指摘され、人文学分野におけるオープンサイエンスの実践について理解を深める貴重な機会となりました。

北陸先端科学技術大学院大学の小泉周副学長によるファシリテーションで行われた質疑応答では、対面およびオンラインの参加者から研究データの管理や公開に関する質問が複数寄せられ、議論を通じて、リポジトリ間の横断検索機能の充実、所属機関の変更に左右されない一元的な管理体制など、研究者が求めるデータリポジトリの要件について、重要な示唆が得られました。

講演終了後に会場で開催されたアフターセッションには、対面参加者全員が参加し、講師を囲んで活発な意見交換が行われました。

■参加者数 131 名（対面25名、オンライン 106名）

■当日の様子



講演する宮川准教授



宮川准教授の講演に聞き入る会場参加者



アフターセッションにて活発に意見交換する会場参加者

■アンケート結果 回答数：41

○所属機関

国立大学：33、私立大学：3、公立大学：1、民間企業：2、国立研究機関・官公庁：2、その他：1

○職種

職員（図書系）：30、URA：5、教員・研究職：1、職員（研究推進系）：2、職員（事務系）：2、出版関係者：1、学生：0、その他：2

○セミナーは参考になりましたか

参考になった：29、まあ参考になった：11

○ご意見・ご感想 ※公開の同意をいただいたものです。

- ・ これまでのご経験等を分かりやすくご説明いただき、大変勉強になりました。

- ・ 普段なかなかきけない人文系の研究の内幕がきけて興味深かった。特異な分野において、研究者に限られるなど、理系でもありうることではないだろうか？研究評価のむずかしさを感じた。
- ・ 大変、盛り沢山な内容を実例や講師のご経験を交えてわかりやすくご説明いただき感謝します。日本の現状を客観的に理解した上で、これまでもよく言われてきたガラパゴス化を食い止めるため、関係者一人一人が協調して取り組むべきことが多々あるように強く感じました。特に、質疑応答でもありましたが日本での個々の大学での「機関リポジトリ」とzenodoのような共通システムでの運用の長短は真摯な議論が必要だと思いました。
- ・ ドイツではOAは義務のため当たり前のことである、という点に改めて日本との違いを感じました。ドイツはファンドが充実しているのも大きいとは思いますが、日本でもたとえば他国と連携してより広範囲にOA化を進めていかないといけないのではないかと考えました。具体的な研究内容、成果をきけてとても面白かったです。
- ・ コプト語という古い言語が、最新のDHによって現代によみがえってくる過程にとってもワクワクしました。同時に、一般にはマイナーとも思われる言語の研究やその研究環境、研究推進のためのプログラムの事業化、オープンアクセス化が、研究機関を超えて進められるヨーロッパ（EU）、ドイツの学術政策をうらやましく思いました。宮川先生のますますのご活躍を応援しています！
- ・ ドイツの先進的な取り組みがとても参考になりました。また、宮川先生の取り組みをご紹介いただくことで、人文学におけるオープンサイエンスのイメージがより明確になりました。zenodoのメリットもよくわかりました。EU全体といった大規模なシステムはオープンサイエンスを推進していく上で非常に有益であり（維持コストがすごいとも思いますが）、また機関異動の多い研究者の業績を1か所にまとめられるというのも魅力的だと感じました。
- ・ 大変興味深い内容でした。紹介されていたzenodoを使ってみたのですが、自分が必要とする情報を見つけることができず、うまく活用の仕方をイメージできないので、問題設定、検索の仕方、関連論文の見つけ方、実際の活用例などを知りたいと思いました。またよろしくお願いします。
- ・ アルファベットではない文字もあんなにテキストマイニングが進んでいることに驚いた。
- ・ 宮川先生のドイツ滞在の話は、科学技術・学術政策局人材政策課人材政策推進室長 高見氏に聞いていただきたい内容であった。SPRING事業での留学生支援が問題となっている現状で、世界の大学等の研究機関がどのように留学生支援を行い、それによりその後の研究者としてのキャリアにどのように影響を与えるかについての非常に良い事例であると感じた。翻って日本の留学生支援が十分にその成果を還元できていないとすれば、そもそも留学生を受け入れる大学機関の体制に問題があるのではないか。一方で研究者の留学体験は、研究者のキャリア形成において単なる移動にとどまらず、思考や価値観の変革をもたらす重要な要素である。そのため留学によって得られる転機は、個人の成長と研究の質の向上に寄与するものと考えられる。こうした人的流動性を支えるためには、研究活動の基盤がその流動性を支持する体制であることが不可欠である、という宮川先生の指摘には深く同意する。研究のオープン化によって学術情報流通を促進するためには、人的流動性の確保と、それを支える研究基盤の整備が前提となることを改めて実感した。また、成果としてコーパスやAIを活用したコンテンツの配信など、学術論文化に留まらない成果の公開・共有の情報提供もあり、研究活動の評価のあり方も検討していかなければならないことも考えさせられた。大変興味深い講演であった。

- ・ 研究的知見のクオリティコントロール等、オープンアクセスの意義と限界（問題点・留意すべき点）が整理されてとてもよい講演でした。研究データの公開は今後の潮流です。研究データの質の確保は、研究者自身が主体になるのですが、スタッフとして、研究推進支援部門、図書館部門がどのようにコミットしていくべきか、ご示唆いただきたいと思います。